

芭蕉の青春

田 中 善 信

平成三年十一月号の「国文学」（学燈社刊）に「芭蕉の謎・無村の謎」という特集が企画され、私に「貝おほひ」は時代を先取りしたのか」という項目の依頼があった。かねて芭蕉の青春時代について考えてみたいと思っていたので、早速引き受けたのだが、四百字詰原稿用紙十三枚という制限枚数では自分の考えを十分に述べるができなかった。そこで、改めて芭蕉の青春時代について考えてみることにしたのである。なお、「国文学」誌上に述べたことと若干重なることをあらかじめお断りしておきたい。

芭蕉の青春時代について考えるといっても、周知の通り十分な資料があるわけではない。むしろ、何もないといっても過言ではないのが現状である。資料のないところに学問は成立しない。したがって、以下に述べることは学問的な研究ではなく、一つの夢物語である。

—

二十九歳の年、芭蕉は「貝おほひ」なる一書を作り、これを故郷伊賀上野の菅原社に奉納した。本書は三〇番の句合で判詞

は芭蕉が書いているが、発句・判詞ともに、当時流行の小歌や奴言葉を用いて作られていることに本書の特徴がある。野間光辰氏は「奴詞や小歌を縦横に取り入れた句合せの趣向やその判詞の行文に、当代の流行に敏感な青年時代の芭蕉の若さと意気込みを見ることが出来る」（『日本古典文学大辞典』）と述べておられるが、このようなことはこれまでも言われてきたことであり、文章の形で示さないまでも、このように感じていた人は多いだろう。ただ、そこらもう一歩踏み込んで、青年芭蕉の姿を具体的に描き出そうとする試みはなかった。そこから踏み込んでいくことは想像の領域であり、もはやそれは学問ではないという考えがあったからであろうが、資料の出現が期待できない以上、空白部は想像で埋めるしか方法がない。

「貝おほひ」の出典については、古くは志田延義氏（俳諧と歌謡）の業績があり、比較的新しいところでは、荻野清氏（日本古典文学大系「芭蕉文集」）や大内初夫氏（校本芭蕉全集）の労作が備わる。歌謡については全く無知な私などは、こうした先学の業績がなければ、「貝おほひ」を読むことはできない。ただ、歌謡の詞章はさまざまに揺れ動いており、伊勢や源氏など

の古典文学、あるいは謡曲などを踏まえた句とは異なり、はっきりと典拠を指摘することはむずかしい。『松の葉のように歌謡の詞章を書き留めたものが残されているが、このような書物に伝えられているのは、さまざまなヴァリエーションの中からたまたま選び出された一つの詞章であって、現存する書物によって『貝おほひ』の出典をすべて解明することは不可能である。こうした障害はあるが、芭蕉が当時の流行歌謡に相当通じていたことは、前記先学の業績から明らかである。

歌謡とは、いうまでもなく歌うものである。歌うという行為なくして歌謡はあり得ない。そして、多くの場合人々の口から口へと歌い継がれることによって流行した。当然のことながら『貝おほひ』に引用された歌謡は、芭蕉が自ら歌うことによって習得したものであると考えてよい。つまり芭蕉は歌うことが好きであり、新しい歌がはやると、いち早くそれを習い覚えようとするようなタイプの青年であったということになる。

江戸時代のはやり歌がどこで作られ、どのように流行していたのか私には分からないが、常識的に考えれば、京・江戸・大坂の遊里で歌われた歌が商人や参勤交代の武士、あるいは地方回りの芸人などによって地方に広められたのであろう。

『貝おほひ』の場合、伊賀地方のみに歌われた歌はなさそうである。ここに用いられた歌謡はすべて、伊賀以外の地方で歌われていたものが、伊賀国内にも入ってきたもの、と考えて間違ひなからう。したがって、それを覚えようとすれば、それが歌われる場に積極的に参加するしか方法がない。現在のようにテレビやラジオ、あるいはカラオケなどで一人で容易に歌を覚

えることのできる時代では、歌謡は座という場を必要としない。しかし、歌われる場に参加することなしには、歌を覚えることのできなかつた江戸時代には、歌謡は必然的に場を必要とした。俳諧は座の文芸であるといわれるが、それに倣っていえば、歌謡は座の芸能であり社交の芸能であったといえるだろう。したがって、その歌謡にかなり通じていた人物は、おおむね極めて社交的で陽気な性格の持ち主であったと考えて誤るまい。芭蕉もまたそうした性格の持ち主であったに違いない。

市川柏筵の「老のたのしみ」の中に、「嵐雪なども俳情の外は、翁（芭蕉）をばづし迷など致し候よし、殊の外気がつまり、おもしろからぬ故也」という記事が見える。これは貞享頃の芭蕉の一面を伝える記事であるが、この頃の芭蕉は、嵐雪などにとつては相当煙たい存在であったことが分かる。しかし、若い時から芭蕉はこのような性格であったとは考えられない。芭蕉が初めからこのような性格であったならば、嵐雪や其角のようなのち者が、まださほど有名でもなかつた芭蕉に、自分の意に反して入門するはずがない。『貝おほひ』から『野ざらし紀行』へと彼の文学が変化したのと同様に、芭蕉の性格そのものが変化したのである。後年の坪内逍遙は謹厳な教育者であったが、若い時は極楽とんぼと渾名されるような青年であったという。こうした例を挙げるまでもなく、人間の性格が年と共に自然に変化するのとは当然だが、芭蕉の場合、延宝末年から天和にかけて人生観が根底から覆るような体験をしたと私は考えている。

ところで、一体芭蕉はどのような場所、どのような機会に、どのような人と歌を歌って楽しんでいたのであろうか。これを考

える前に、歌謡がどのような場所で歌われたのか考えておきたい。田植歌のような労働歌は当然その労働にともなつて歌われ、子供の時から聞き慣れていたであろうが、流行歌謡はこうした歌謡とは根本的に性格を異にする。流行歌謡が歌われる場所として、まず考えられるのは遊里である。もちろん、歌謡を歌う場所は遊里に限らないが、ただ歌謡を正式に歌うとなると、どうしても三味線の伴奏を必要とし、三味線が弾けるような人間がいるところというと、遊里が最も適当な場所ということになる。だが、地方の城下町では遊里のないところが多い。伊賀上野ではどうであつたか判然としないが、『色道大鏡』などによると、伊賀の国のみならず藤堂家の本城のあつた津にも遊里があつた形跡はない。『宗国史』によると、天和三年に出された禁制に「此頃町々裏・片脇之家々に遊女・野郎かくし置、令商売候輩有之由云々」という文句が見える。これによつて上野にも遊女を置く家があつたことが分かるが、本来遊女を置くことが禁じられているわけだから、こうした家は歌などを歌える場所ではなかつた。それに、こうした場所に入出りできるような経済的余裕が芭蕉にあつたとは考えられない。芭蕉が歌謡に接することのできた場所については、別の観点から考えなければならぬ。

二

芭蕉の生家が何を生業としていたのか、今一つ判然としない面があるが、農業で生計を立てていたと考へてまず間違ひあるまい。今柴蔵氏は、芭蕉の実家に当たる場所が上野城下の古絵

図に「農人」と記されていることを明らかにされたが、具原益軒は『東路記』で、「木曾より太田迄の間の農人、すき一を兩人にて取て田をすく」と、農人と百姓を同義語に用いている。芭蕉の家系や家柄については、いろいろと説があるが、芭蕉が生まれた当時の松尾家が、身分的には士・農・工・商の「農」であつたことは否定できない。つまり、芭蕉は農家の次男として生まれたということになる。

松尾家がどの程度の農家だつたのか全く分からないが、芭蕉が江戸へ出た二十九歳の時まで兄半左衛門の家に同居していたらしいことから、次男の芭蕉を分家させるような財産が松尾家になかつたことは確かである。現在では二十九歳の独身男性は珍しくもなんともないが、当時の二十九歳はすでに中年であり、実家に財産があれば、当然分家して一家を構へ子供の一、三人はいる年齢である。まさか、将来俳諧師になるために、みずから望んで二十九歳まで芭蕉は独身生活を送つたわけではあるまい。芭蕉が中年まで独身生活を通したのは、松尾家の生活が豊かになかつた証左であるとして見てよからう。

松尾家の家計が決して裕福でなかつたことは、次の芭蕉の書簡の内容からもうかがえる。

其元旧年御仕舞も、御不自由に可有御座候。此方も永々旅がへり、何やかや取重、毎日／＼客もあつかひなどに而、冬のしまひもはつ／＼に御座候而、金子少も得進じ不申候。

これは元禄二年正月十七日付の兄半左衛門宛の書簡だが、一読して分かる通り、送金できなかったことに對する断りの手紙である。この文面から、芭蕉が例年兄半左衛門に仕送りをしてい

たらしいことがうかがえると同時に、実家の家計は、芭蕉の仕送りがなければ年末のやり繰りも「不自由」な状態であつたことが分かる。半左衛門には子供はなく、妹を養女にしたといわれており、その家族は当時としては小家族であつたといつてよい。にもかかわらず、半左衛門の家は年末の支払いにも事欠くような経済状態にあつたのである。

松尾家の貧しさをうかがわせる書簡がもう一通ある。

名護屋迄之御状、並加兵へ持参、共に相達し候。先以姉者人御事、兼而急々に見請候故、貴様ヲ別而頼置申候処、愈御見届、大慶に存候。一兩年不自由不調之事共、さて／＼残多いたはしく存候。

これは貞享五年九月十日付の粕屋市兵衛（卓袋）宛の書簡である。阿部正美氏は、「別而頼置」とは重病の姉の世話を卓袋に頼んだものと説明されているが、私は、経済的な援助を頼んだ文言だと考えている。伊賀上野には兄半左衛門を初め、肉親がいるにもかかわらず、他人の卓袋に「別而頼」まなければならぬ事柄とは何か。私には経済的援助としか考えられない。後の「一兩年不自由不調之事共云々」の文言は、姉の生活がかなり行き詰まっていたことを示しており、このことから、芭蕉が卓袋に依頼したのは姉の生活の援助であつたと考えられる。卓袋は芭蕉の門人であり、伊賀上野の裕福な商人だが、姉の生活の援助を、門人とはいいながら他人の卓袋に頼まねばならなかつたということは、おのずから兄半左衛門の貧しさを物語っている。経済的な面において、兄は頼りにならなかつたのである。

芭蕉が生まれた頃から松尾家がこのように貧しかつたのか、半左衛門の代になつて家運が傾いたのか分らないが、農業という仕事の性格上、半左衛門の代になつて急に家運が傾いたとは考えられず、父与左衛門の代から松尾家は貧しかつたと考えてよからう。そして、その与左衛門に六人の子供があつたことを考慮すると、松尾家の家計の苦しさは、むしろ与左衛門の代の方が一層切実であつたと思われる。芭蕉はこのような環境に育つたのである。

三

芭蕉の兄でありながら、半左衛門が俳諧を嗜んだらしい形跡はまかつたくない。兄弟でも才能や趣味を異にすることはごく普通のことであり、半左衛門が俳諧に関心がなかつたとしても怪しむに足りない。また、貧しい農家の長男に生まれた半左衛門に、文芸に遊ぶ余裕があつたとは考えられない。では、同じ家に生まれながら、次男の芭蕉がどうして俳諧という遊び事の世界で活躍できたのか。江戸時代後期になると、俳諧は社会の底辺層にまで浸透するが、芭蕉が俳諧を始めた頃は、まだ、比較的裕福な階層の遊び事であつた。そうした遊び事を芭蕉が楽しむことができた背景に、芭蕉と蟬吟の関係を考えないわけにはいかないであらう。

蟬吟は、いうまでもなく、伊賀上野城の侍大将藤堂新七郎良精の嗣子良忠の俳号だが、新七郎家は五千石の大名である。蟬吟と芭蕉が主従関係にあつたことは定説だが、私は芭蕉の直接の主人は蟬吟の父良精であつたと考えている。問題は新七郎家

における芭蕉の地位であるが、正規の家臣ではなく武家奉公人であつたとする今榮蔵氏の説に従いたい。

全国どこでも同じだと思ふが、伊賀上野には武家奉公人に、歩行之者若党・鎧持・馬取・草履取・小人という種類があつたことが『宗国史』に見えている。若党は体力強健な者でなくては動まらず給金が最も高い。以下順次給金が安くなり、小人が最も安い。芭蕉が今氏のいう通り武家奉公人であつたとして、芭蕉の地位がこの内のどれに該当するのか不明である。ただ、『老のたのしみ』に「芭蕉翁は藤堂和泉守様御家来藤堂新七殿の料理人のよし」とあり、遠藤日人の「芭蕉伝」に「藤堂家の一門藤堂新七郎、其家臣也。御台所御用人を勤めたりと云」とあるところから、芭蕉は新七郎家の台所方に勤めていたらしいことが窺える。五千石の大手ともなれば、当然台所方の雑用係として何人かの奉公人がいたであろうが、芭蕉がその一人であつた可能性は極めて高い。右に挙げた奉公人は、若党以下草履取までは、主として主人の外出の際の職種であるから、台所の雑用係のような仕事はおそらく小人の役目であり、芭蕉はこの最も給金の安い小人の地位にあつたと考えていいのではあるまいか。

芭蕉が新七郎家に奉公したのは彼の俳諧の才能が蟬吟の目に留まつたためかどうか分らないが、確実にいえることは、新七郎家に仕えるようになって蟬吟との関係が生じ、このことによつて芭蕉は、自由に俳諧の世界に遊ぶことのできる境遇を得たということである。新七郎の嗣子良忠は蟬吟という俳号をもつ程の俳諧愛好者であつたが、その蟬吟と密接な関係をもつた

ことがその後の芭蕉の人生を決定した。

寛文五年、伊賀上野において貞徳十三回忌の追善俳諧百韻が興行され、発句は蟬吟、脇句は季吟が詠んでいる。以下、連衆は政好・一笑・一以・宗房(芭蕉)である。この百韻における季吟の句は脇句のみであるところから、季吟は京都からこの脇句を送つて一座には出席しなかつたと考えられている。したがつて同座したのは、蟬吟以下五名ということになる。蟬吟についてはすでに説明したが、政好は「上野中屈指の富商」(今榮蔵氏「松尾芭蕉」)であり、一笑は「商賈で紙屋を営み、上野の鎮守菅原社に大きな石灯籠を寄進している」(同)という。一以については不明だが、他の三人はいずれも芭蕉が社会的に対等の付き合ひのできる人々ではない。むしろ、新七郎家の一介の奉公人に過ぎない芭蕉が、この席に出席を許されたということは、彼にとつて破格の待遇であつたといつてよい。身分制度の厳しい時代に、新七郎家の嗣子である蟬吟と同席すること自体、異常な事であつたといわねばならないが、このことから芭蕉がいかに蟬吟から寵愛されていたかが分かる。蟬吟の後ろ楯があつたからこそ、芭蕉は上野の上流階級の人々と交わる機会をもつことができたのである。俳諧を愛好する上層の人々にとつて、芭蕉は単に重宝な存在であつたというに過ぎなかつたであろうと思うが、とにかく、貧しい農家の次男とは普通は無縁の世界に身を置くことができたのは、彼の幸運であつたといわなければならない。そして、蟬吟の寵愛に応えるためにも、芭蕉は俳諧に精進しなければならぬ状況にあつたのである。

原田信男氏の「江戸の料理史」に、

一方、茶の湯と同じく、この時代（注、享保期）に忙びを基調とする傾向が強まった俳諧の世界でも、料理が楽しまれていた。もともと俳諧の祖型をなす連歌の座でも料理が供されるという伝統は中世にはじまるものであった。

と述べられているが、俳諧と料理の関係はまだ詳らかにされていない。

元禄七年八月十五日、芭蕉は故郷の無名庵で月見の会を催しているが、その時の芭蕉自筆の料理の献立表が現存する。これは月見という特別の場合であるが、土芳の「横日記」の元禄二年の条に「霜月廿二日草庵に会有。きのふ半残宅に翁有て、草亭の会の談して定む。根ぶか雑水、ちやは園風が七リン、茶わん銘々、菓子、いりまめ、すみとり、紙にしたたむ」と記されている。これは土芳草庵の句会の献立であるが、蕉風の寂の世界が献立にも現れている。

こうした例を一つ挙げるまでもなく、早くから俳席に料理が供されたのとみて間違いあるまいが、初期の頃の方が豪華な料理が出されたのではなからうか。そして料理屋もない時代だから今日のように仕出しの料理を取るなどということがあるわけもなく、出される料理は多く主催者側の手料理であつたろう。芭蕉が新七郎家の料理人であつたという「老のたのしみ」の記事に幾分かの実情が含まれているとすれば、蟬吟主催の俳席には、芭蕉が料理を作ることであつたかも知れない。当時、小料理は

成人男子の嗜みの一つであつたから、芭蕉に料理の心得があつたとしても不思議ではない。あるいは、こうした席に供される料理については、芭蕉は全てを任されていたのかも知れない。料理を作らないまでも、新七郎家の奉公人である芭蕉は、俳席の雑用を勤めたとみて、まず間違いあるまい。

料理に酒は付き物だが、酒が出れば当然歌が出るということになる。その歌は多くは当時のやり歌であつたであろうが、伊賀上野のような地方都市では、そうしたやり歌を持ち込んでくるのは、主として参勤交代で江戸から帰ってくる武士か、商取引で上方へ出ることの多い商人であつたと思われる。芭蕉がやり歌を習い覚えたのは、俳席の後のこうした酒席であつたのではなからうか。とにかく、芭蕉はいち早く流行歌謡に接することのできる境遇にあつたことは間違いない。

「宗国史」によれば、伊賀では振舞いが禁止されている。たとえば、正保三年には早くも「家中振舞可為停止。若、相背輩ハ過料として銀子貳枚ヅ、可出之。但し、むこ取・嫁取等は可為格別之事」という定め書きが出ている。その後もしばし同様の禁令が出ているが、これが厳格に守られたとは考えられない。こうした禁令がある以上、おおつぱらに酒を飲んで騒ぐことはできなかつたであろうが、新七郎家の広大な下屋敷の一室や、富裕な商人の別宅などで開かれる宴席で三味線を鳴らしても、外に漏れる心配はなかつたであろう。

五

当時の武家奉公人にはどのような将来があつたのか、私には

分らない。おそらくは、奉公していた間に溜めた給金を元手に小商いでもするか、あるいは田畑を買って百姓をして暮らすか、その選肢は極めて限られていたであろう。奉公人には次男三男が多かったであろうから、婿養子に行くというのもその選肢の一つであつたろう。しかし、芭蕉には婿養子の口もなかったらしい。なまじ俳諧で名を知られたことが、婿養子に行く妨げになったのではなからうか。実直な商人や百姓が、俳諧などという道楽にうつつを抜かしているような人物を、婿養子にするはずがない。蟬吟に寵愛されて一見恵まれた生活を送っているかに見えた芭蕉の将来も、決して明るいものではなかったのである。

もし蟬吟が家督を相続して新七郎家の当主になれば、あるいは芭蕉の人生に新しい選肢が加わったかも知れない。しかし、その頼みの蟬吟は寛文六年に二十五歳で没した。芭蕉は二十三歳である。芭蕉は新七郎家の奉公人であり、蟬吟が個人的に雇い入れた奉公人ではなかったと思うが、芭蕉に特に目を掛けてくれた蟬吟が亡くなった後、新七郎家における芭蕉の立場が極めて微妙なものになったであろうことは、容易に想像できる。そのまま勤め続けることもできなかったわけではなからうが、勤め続けたとしても蟬吟亡き後の芭蕉はただの小人である。辞めてどうなるか。二十三歳では商家に奉公に出ることもできない。すでに述べた通り、松尾家には芭蕉を分家させるような財産もない。蟬吟亡き後の芭蕉の将来は、正にお先真っ暗という状態であつた。

ただ一つ、芭蕉の救いはやはり俳諧であつたと思う。この頃

の芭蕉は、上野の俳諧愛好者の間では欠くことのできない存在になつていたと思う。上野の旦那衆の主催する俳席に招かれることも多かつたであろうが、芭蕉に教えを乞う新しい俳諧愛好者もいたであろう。ずぶの素人がいきなり京都の宗匠に入門するとは考えられず、身近に俳諧を嗜んでいる者がいれば、まずその人に教えを乞うのが普通であろうが、そういう場合、芭蕉は恰好の存在であつたと思われる。しかし、伊賀上野のような地方都市で、俳諧だけで生計を立てることは不可能である。だが、俳諧以外に、芭蕉が将来を託しうるものがあつたのだろうか。

寛文十二年芭蕉は江戸へ下つた。

(本学教授)